

fure-fure





学部生へのメッセージ 実習に臨む心構えと接遇について

臨床実習委員会委員長: 嶋岡 暢希 教授

臨床実習は、大学で学んだ知識や技術を、実際の対象者や医療・保健の現場で統合し、看護専門職としての姿勢を身につける重要な学びの場です。学生のみなさんにとっては緊張や不安を伴う経験でもあります。その一つひとつが看護者としての成長につながる大切な機会となります。

看護学部では実習に臨む学生の基本的な姿勢を明確にするため、実習要項に「臨地実習における学生の責務」を設けていますが、その一つに「接遇」があります。接遇とは、単なる礼儀やマナーではなく、年齢や立場を問わず関わるすべての人に対し、安心感と信頼をもって受け止めてもらえるよう、看護専門職者としての姿勢を態度や行動で示すことです。

本年度は学生・就職支援課と連携し、2・3年生それぞれを対象とした臨床実習前の接遇研修を実施しました。実施後のアンケートでは95%が「とても参考になった」「参考になった」と回答し、「(相手を)不快にさせる気がなくても不快にさせてしまうことがあるとわかった」、「社会の一員として自覚を持った態度や言葉遣いをするのが大切だと思った」、「看護をより良く学ぶためにもマナーは最低限必要なのだと理解した」などの感想が寄せられました。これらの感想からも、実習の心構えとして接遇を意識することで、看護専門職としての自覚を育み、実習での学びの質を高めると考えます。

学生のみなさんにとって実習は学ぶ場ですが、医療・看護チームの一員としてみられる場でもあり、学生である前に一人の社会人として行動することが求められます。挨拶、身だしなみ、言葉遣い、時間を守ること、報告・連絡・相談といった基本的な行動は、実習を円滑に進めるだけでなく、対象者の安心と安全を守ることに直結します。学生のみなさんが、これからの実習で接遇を意識し、自身の課題に誠実に取り組むことを期待しています。臨床実習委員会では、みなさんが実習の場で安心して学び、成長できるよう、引き続き支援してまいります。



災害の備えについて

災害看護学: 木下 真里 教授

災害時
指示があるまで
トイレの水は流せません

災害時のトイレの使用方法...

- 1 トイレの安全を確認**
ひび割れ、水漏れ
ヒビが入っているなど、破損している場合は、使用を控えましょう。
- 2 ポリ袋を使用する**
ポリ袋を便座の下にはさむ
ポリ袋の口を上に開き、ポリ袋を敷く
- 3 使用後は排泄物を廃棄用のごみ箱へ**
しっかりとむすぶ！
用を足した後は、黒いポリ袋を取り出し、口をむすんで廃棄用の廃棄用ごみ箱へ、蓋が閉まれば使用しましょう。
※災害時にはごみの回収はすべてはできません。臭いが漏れないように、空気を抜いてしっかりとむすぶようにしましょう。
- 4 手の清潔を保つ**
YouTube チームトイレの自衛
災害トイレについて

災害時にトイレ(T,排泄)、キッチン(K,食事)、ベッド(B,睡眠)を発災48時間以内に整備する“TKB48”という言葉が流行しました。南海トラフ巨大地震の発生時、本学池キャンパスでは一部の浸水被害とその後の物資搬入やインフラ復旧の遅れが想定されますので、発災直後からニーズがあるトイレについて令和7年に方針を見直し、上下水道復旧までは、ポリ袋を使って既存のトイレ設備を利用することにしました。今後は、帰宅困難となる学生、教職員が安全・健康に過ごすことができるように避難場所となる教室等の環境を整えていくことにしています。

看護学部の教職員、学生は災害についての意識が高く、中には普段から熱心に災害医療訓練に参加している学部生もいます。望ましいことではある一方で、とくに無資格の学生の場合、実際の災害現場では慎重に行動してほしいと思います。災害時の医療行為やトリアージは、クイズ競技やゲームではありません。医療機関との連携など、総合的な能力が必要で、責任を伴うものです。また、災害時に人を助けるためには、まず自分たちが助かなければなりません。家具の固定、避難ルートの確認、備蓄など、基本防災はできていますか。また、避難する際は、自分が漏電火災の加害者にならないようにブレーカーを切りましょう。土砂災害、液状化によって孤立する場合がありますので、周囲の安全もハザードマップや散歩で確認しましょう。とは言え災害時には、どれだけ物資を備えても、どれだけ頻繁に訓練をしても、太刀打ちできないような状況が起こります。一般に、予期せぬ困難に対処する能力「レジリエンス」は、心身が良好な状態にある場合に高まるとされています(米国心理学会他)。つまり、平時から心や体にゆとりをもって生活すること、災害時にも、安心・安全、快適に避難生活を送るために必要な備えをすることが、我々にとって最優先の備えかもしれません。



■ 各学年の大学生生活

■ 1回生 ■



1回生の後期は、診断学やフィジカルアセスメント、援助関係論など対象者とコミュニケーションをとりながら人の心身を理解するための基本となる技術を学びました。写真はフィジカルアセスメントの学内演習の様子で、身体を動かすことに関連した脳神経系の観察をしているところです。課外活動においても高知医療センターで患者さんやご家族に対して施設案内のサポートなどのボランティア活動を行ったり、高知医療センターとの合同災害訓練に参加しました。また、12月と2月に初めての臨地実習となる「ふれあい看護実習」がありました。宅老所での利用者とのかかわりを通して、これまで学んできた知識や技術を活用しながら看護の対象となる人を生活者として理解し、将来目指す看護への学びを深めています。

(1回生学年担当 田井 田代 竹中)

■ 2回生 ■



2回生は8月～9月に「看護基盤実習」、12月に「看護実践能力開発実習Ⅰ」がありました。臨地実習は既習の知識や看護技術を医療現場で実践することで、座学では学べない実践的なスキルを習得する貴重な機会です。学生は患者さんとの関わりや看護ケアを通して、生きた看護の知識と経験を得ることができていました。実習前は緊張感に包まれていましたが、実習を終えた後は充実感と安堵感が伺えました。授業では専門分野に特化した看護臨床科目の課題やグループワークに励むとともに、2月の後期試験に向け学習に取り組んでいます。また、課外活動や友人との交流などの多様な経験を通じて、自己成長や社会性を育てています。

(2回生学年担当 村川 小澤 徳岡)

■ 3回生 ■

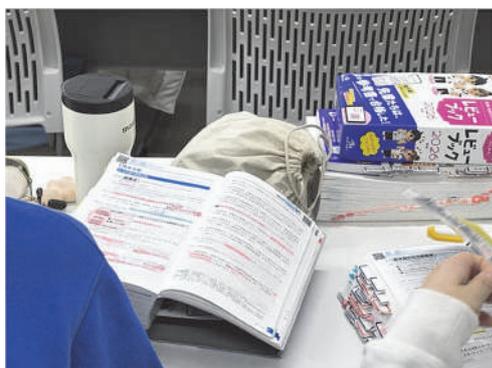


3回生は、10月より領域別看護実習が開始され、臨地の場面を体験し、学生は看護実践に関する様々な学びを得ています。また1月には「看護研究の誘いPart2」が開催されました。本学では、卒業研究の一環としてグループで看護研究に取り組んでいます。学生の意向を確認したうえで、専攻領域を決定し、研究計画の立案からデータ収集と分析、論文の執筆まで、看護研究のプロセスを一通り学習します。看護研究の誘いは、看護研究に取り組む学生の準備性と主体性を育むことを目的として実施しています。

Part2の誘いでは、領域別にどのような看護研究に取り組むことができるのかについて、各領域の先生方から情報提供を受けました。看護研究を通して、様々な人に出逢い、そしてたくさんの学びや気づきが得られることでしょう。学生の更なる飛躍に期待したいと思います。

(3回生学年担当 畠山 岩崎 塩見)

■ 4回生 ■



4回生の1年は、各自の就職活動と並行して、実習や研究に取り組む多重課題の1年でした。前期は、今年度から新たにスタートした新カリキュラムでの実習に取り組み、看護の知識と技術を統合的に活用した看護実践や、看護を系統的に分析・理解し看護の質向上に還元していくこと、看護・保健活動にデータ分析を活用することなどに挑戦してきました。年間を通して取り組む看護研究では、これまで学び、実践してきた看護の中で、疑問に感じ探求したいと感じた問いを自分たちで立てて、10か月間かけてデータ収集と分析に取り組み、その成果を12月にまとめ上げました。

そして、4年間の全ての実習や授業が終わった12月からは、それぞれの学生が目指す資格取得に向け、国家試験の勉強を頑張っています。看護職者としての今後につながる力を身につけて、最後まで一生懸命走り続けていただきたいと思います。心から応援しています！

(4回生学年担当 瓜生 山中 田中 池内)



■ 国家試験対策について

看護学部では、看護師国家試験・保健師国家試験・助産師国家試験の合格率100%に向けて、国家試験対策委員と、学生委員会や教務委員会の教員が連携しながら、4年間の継続した学習支援を行っています。主体的に取り組むことができる環境づくり、IT教材（国家試験問題web版）を活用した自己学習の支援、各回生のガイダンスや個別対応による動機づけなどを行うことで、国家試験に全員が合格するよう支援を行っています。

看護師国家試験対策では、特に4回生の支援として、模試選定の手伝いや学習会などを行っています。学習会は、週1回程度、知識の習得と学習時間の確保を目的に、自己学習形式やレクチャー形式など、模試結果と学生の要望に応じて企画しています。また、研究や就職活動など多重課題をこなす難しさや学習方法への迷いなど学生の希望と学習の進捗状況に合わせて看護師国家試験対策委員や学年担当が面談と学習相談を行っています。

保健師国家試験対策では、4回生の秋頃から、看護師国家試験対策と同じ日に、問題演習に取り組んでいます。問題演習では、解説をとおして、正答の確認と、解答に至るための知識や法律を説明し、日々の学習に役立つことができることを目指して支援しています。また、国家試験1か月前からは、個別支援として、模擬試験の結果を踏まえ、勉強時間の確認や、学習方法の助言を行っています。

助産師の国家試験対策では、学生一人ひとりが自分に合った学習方法を継続し、コツコツと積み重ねていけるよう、個別面談を通してきめ細かくサポートしています。また、複数回実施される模擬試験の結果を丁寧に振り返ることで、着実に知識が定着するよう支援しています。国家試験での合格、そしてその先にある「助産師として活躍する」という夢の実現に向けて、教員一同、学生たちの頑張りを全力で応援しています。

(国家試験対策委員 小澤 徳岡 依岡)



■ 学生の活動



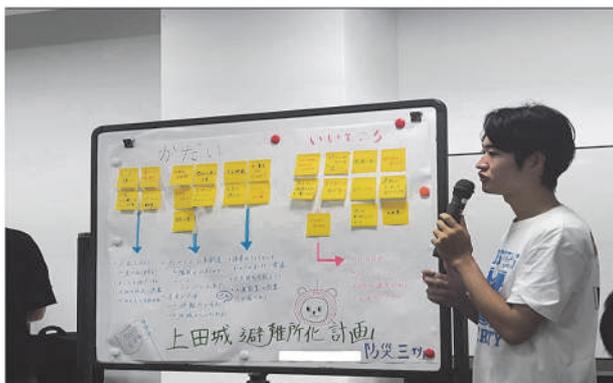
公立大学学生ネットワークでは、LINKtopos（リンクトポス：全国公立大学学生大会）を開催し、災害支援・防災に留まらず、地域活動を行っている学生らが全国から集まり、ワークショップ等を通じて研鑽・交流を図っています。9月に長野県で開催されたLINKtopos2025に参加し全国の公立大学で学ぶ学生と直接交流できたことは、非常に貴重な経験となりました。

普段の学生生活では出会うことのない他大学・他分野の学生と意見を交わす中で、それぞれの大学が地域とどのように関わり、どのような課題意識を持って活動しているのかを知ることができました。

交流を通して自分の考えを言葉にして伝えることの難しさや、相手の意見を受け止める姿勢の大切さを実感しました。また、多様な視点に触れることで自分自身の視野が広がったと感じています。

今回得た学びや新たなつながりを、今後の学生生活や地域との関わりの中で生かしていきたいと思えます。こうした学生同士の交流の場の意義を、改めて実感する機会となりました。

(看護学部1年生：井上 小島 長瀬)



fure-fureは今号をもって発送を終了することになりました。今後は看護学部ホームページやSNSで情報をお届けします。